

現代建築作品における「記憶」の概念の主題とその表象に関する研究

— 1968年以降の博物館・記念館・資料館の事例分析を通して —

A Study on the Subject and Representation of the Concept of "Memory" in Contemporary Architectural Works,

Through the analysis of case studies of museums, memorials, and archives since 1968

○末包伸吾 (神戸大学) *1 増岡亮 (大手前大学) *2 後藤沙羅 (神戸大学大学院) *3

*1 Shingo SUEKANE, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Rokkodai, Nada, Kobe 6578501, suekane@people.konbe-u.ac.jp

*2 Ryo MASUOKA, Otemae Univ., Gosakasyo, Nishinomiya, 662-8552, masuoka28@gmail.com

*3 Sara GOTO, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Rokkodai, Nada, Kobe 6578501, saragoto@people.konbe-u.ac.jp

キーワード: 現代建築, 記憶, 表象

1. 「記憶」の概念に関する一般的考察

1.1. 哲学分野における「記憶」の概念

1.1.1. アンリ・ベルクソン(1859-1941) : ベルクソンは人間の記憶を「第一次記憶」と「第二次記憶」に分類している。「第一次記憶(純粋記憶)」は記憶したという行為についての記憶である。すなわち、自分の生涯における過去の出来事についての記憶である。人間の精神はこれらのすべてを無意識的にもれなく記憶しているとベルクソンは考えている。一方で「第二次記憶」は、記憶した内容そのものの記憶であり、無地間的なものである。「第二次記憶」は、繰り返し想起し、身体に刻み込むことで「習慣的記憶」となる。

1.1.2. マルセル・ブルースト(1871-1922) : ブルーストは、記憶をこのような「無意志的記憶(involuntary memory)」と「意志的記憶(voluntary memory)」との二つに分類している。「無意志的記憶(involuntary memory)」は「偶然」に到来するものであり、主体の側が自在に想起することができないため、強い情緒的反応を伴い、意識的な制御を凌駕するものである。「無意志的記憶」は現在において、真実の経験として生きられる絶対的な記憶である。それに対して、「意志的記憶(voluntary memory)」は意図的に思い出すことができる記憶であり、「死んだもの」だと説明している。

1.1.3. モーリス・アルヴァックス(1877-1945) : 個人の記憶が家族や階級、社会集団など所属する共同体内で共有されることに注目して、「集合的記憶」という概念を提出した。この記憶のもつ共通性は、個人的な記憶の力をはるかに上回る力を持つものである。同じ出来事を多くの人が経験するために、それが個人的な経験として記憶されていたとしても、その記憶は既に集団的な性格を備えているのである。

1.1.4. ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940) : ベンヤミンは、「物語」を個人の体験を伝える「情報」と区別して、集合的な記憶を含んだ経験を伝えるものとしている。個人的な体験はまず記憶され、

この記憶が経験のうちで集合的な記憶として追想され、それが物語として構築されることで想起される。

1.1.5. ジャック・デリダ(1930-2004) : 脱構築主義の哲学者であるデリダは、『エクリチュールと差異』の「フロイトとエクリチュールの舞台」と題する章で、過去の想起とは、過去を忠実に再現するものではなく、その痕跡からその都度再構築されるものだと論じ、もう再現することの叶わない、その原点としての過去を「原-エクリチュール」と呼んでいる。

1.3. 本研究における「記憶」の概念の定義

① 「記憶」はさまざまな印象や感情と絡め合う情緒的なものであり、私たちの現在にも影響を及ぼす。

② 「記憶」には無意識的記憶と意志的記憶がある。

③ 「記憶」は個人的なものである一方で、人々のあいだで共有される集合的なものである。

④ 「記憶」は媒体を介することでアクセスしやすくなる。

2. 現代建築家の言説にみる「記憶」の概念の主題とその表象に関する鍵語の抽出

現代における建築家の論考として、「新建築」誌、1968年から2021年までの計648冊から、「記憶」の概念に関して言及している作品の創作論、計170論文から計369言説を言説の分析対象としている。その結果、「記憶」の概念の主題は80の鍵語を、表象は28の鍵語を抽出した。

3. 現代建築家の言説にみる「記憶」の概念の主題に関する考察

3.1 「記憶」の概念の主題に関する分析 : 上記の方法で抽出した

「記憶」の概念の主題に関する鍵語についてそれらを概念的に階層化された項目として示し、それに基づき内容を分析することを通じて、現代建築における「記憶」の概念の主題とその表象を総体的かつ相対的に考究し、その特質を検討する。鍵語の抽出例は

表1に示した。鍵語は第1水準を【】、第2水準を《》，第3水準を□で示す。

表1 現代建築家の「記憶」に関する言説と鍵語の抽出例

番号	言説	鍵語		
		第1水準	第2水準	第3水準
37-3	また、外観は抽象的な形状が、飯倉山と人工池に調和したスケールを保ちながら、敷地の修景の中に組み込まれます。建築の硬い、鋭角的な形状が、柔らかい曲線で構成された砂丘や人工池の姿と干渉して、自然をいっそう引立てるからです。	風景	自然	風景を強調
73-9	建築は人びとの生活や建築構成材が数え切れない。時間の出来事を歴史として刻み込んでいくものだと考えます。すなわち建築は、誕生したときからその風土と共に時を経ることに歴史を堆積し、変容していくものです。そしてそれは、時の経過と共に存在の意味を深めていくべきものだと思います。	時間	現在	時の移ろい
149-4	最大の課題は、日本文化の根源を説く哲学者にふさわしい空間構成を模索することであり、私はその典型を日本の「床」の空間に求めた。	伝統	日本	日本の空間特性

以下では第3水準までの鍵語全てを対象に検討を行った。

3.1.1 【環境】について：“木の架構がつくる建築空間によって、木の文化を五感で体験できる場所を緑深い環境の中につくることで、人間と自然環境の共存を表現しようとした建築である。”(79-1)

近代思想界において、主体と【環境】を統合的に捉える試みがなされていた様に、人は、周辺【環境】に対して五感をもった身体を通じて受容し、世界を《意識》している。身体は《体験》を通じて《潜在意識》に刻み込まれている心的表象が《想起》されたり、これからの《体験》を《予期》することで、人間の実存的なあり方が考察される。

1). 《体験》：“この中庭はアプローチの道程である以上に、エントランスからいちばん奥にある部屋から見られるための庭であり、それぞれの場所に依拠して存在する多義の意味をもつ庭といえます。”(73-4)

【環境】は身体を用いた《体験》により主体に受容される。[多様なシーン]を伴う《体験》は、[体験の変化]、[体験の繰り返し]、[偶発性]、[選択性]により、強く[五感に訴える]。また、[ひとつづきの体験]が可能であったり、[内外の連続性]が感じられる動線では物語性を伴った《体験》ができ、主体に強く記憶される。

2). 《想起》：“「逆さ富士」型本体のかたちに沿って、内側には螺旋状のスロープが回り、登山体験を想起することができる。”(163-2)

《想起》において人は、《現在》から離脱し、《過去》の出来事や[木漏れ日]のイメージを現実化させ[追体験]する。

3). 《予期》：“滑らかな壁面が内部の風変わりな構成を包み隠しており、屋根から突き出た「泡」のようなヴォリュームが内部空間を予見する唯一の手がかりとなる。”(102-2)

建築の経験の中で、空間の操作により、五感が刺激され、これからの[期待感]を《予期》することができる。

4). 《潜在意識》：“人間の遺伝子の中には異次元をのぞくという嗜好があります。都市の中に建築という虚の宇宙をつくっていかうという意図でダブルスパイラルといった4次元的なものだとか、胎内潜りだとかをつくったわけです。特に二重螺旋は記憶の構造、過去から未来へ、未来から過去へというSF的な発想でやっています。

“(39-3)

人のもつ《潜在意識》として、生まれる前の[胎内潜り]としての「記憶」や日本人であることで感じられる[日本の伝統]が[無意識的記憶]として不意に想起する空間

5). 《意識》：“迎え入れる装置としての大ゲートでは、階段を昇り詰めたとき、眼前に広がる景観が、来館者を感じさせ、博物館に感情を埋没させていく。”(23-1)

[日常の延長]としての建築体験や、非日常の体験としてある対象に[感情の埋没]を起こさせることや[思索を深める]体験をすることで、主体の「記憶」と【環境】を結び合わせる。

3.1.2 【風景】について：“建築の色彩は銅板葺きの自然色と、外壁タイルの利休ねずみの色彩である。色彩としての利休ねずみ色は、個と全体を溶融する方法論を象徴するひとつの仕掛けでしかないが、熊本博物館の場合、熊本城の屋根の簡明な直線と、黒い色彩が、少なからぬ影響を与えている。”(19-3)

《自然》や《街並み》の人々に共有される【風景】は、《日本》や地域のアイデンティティとなる。また、人の深層[意識]に刻まれた原風景は個人的「記憶」としてだけでなく、集団的「記憶」としても想起される。

1). 《自然》：“建物は周囲の田園風景に馴染むことを第一と考え、環境と呼応する施設づくりを模索した。・・・全体の色彩は、土のイメージを色彩化し、植物と合わせたグラデーションで周辺との融合を図った。内部も外壁との調和を重視し、自然色を採用した。”(105-1)

[周囲との調和]や[大地との連続性]により《自然》と建築を結びつける試みが多くみられる。また、既存の[風景を強調]したり、元あった[風景の再生]を試みたり、新たな建築により[新たな風景]を創出する試みや、主体がどう[風景の知覚]をするのかという試みがみられる。

2). 《街並み》：“ファサードのリズムが向かい側に転調されており、さらにその街並みを特色づける。”(57-2)

既存の《街並み》に対して積極的に[周囲との調和]を行い、[景観との連続性]を目指すものが多くみられる。また、周囲の街並みを批判的に捉え、[新たな風景]を創出する試みや、既存の[風景を強調]、元あった[風景の再生]を試みるものがある。

3). 《日本》：“外壁の利休ねずみ色は、日本の風景にもっとも浸透しやすい色彩として採用した。”(16-3)

[日本の風景]をデザインに取り込むことで、《日本》人の集団的「記憶」を現在に再解釈している。

4). 《意識》：“ぐるりと敷地を囲む田園景観、南西に広がる集落景観、村のシンボリック的存在となっている穏やかな丘陵景観、大屋根を大きくうねらしながら、集落の杜(=人びとの生活)と対峙する資料館の4つの景観は、ひとつの対話の中に組み込まれ、独自の心象風景が形づくられる。”(75-1)

人の《意識》の中に[心象風景の形成]をすることで、地域のアイデンティティの構築を試みている。

3.1.3 【象徴】について：“この建築を、内部に作者そのものを表現する展示と、外界の自然との間に存在する抽象化されたものと考え、様式にとらわれず、意匠を消すことで、作品と自然を浮き上がらせることを意図しました。”(37-1)

【象徴】は具体的なものと抽象的なものが関連づけられ

とつになったものである。《対象（人・もの・出来事）の表現》や《自然》の表現としての「記憶」の表象が、徴となり、それが建築の固有性を担保するのである。

1). 《対象（人）の表現》：“テーマとなる文学と文学記念館の建築の関係は、中身とその容器のような関係にあると考えることができる。今回は、「白い容器」を準備して、作家の精神が抽象的に浮かび上がるように考えた。“（100-1）

《対象（人）の表現》は対象の〔人柄の表現〕、〔思想や理念の表現〕、対象が作成した〔作品との対応〕、対象が生きていた〔時代精神〕、〔生家のイメージ〕を反映させたもの、対象から〔連想されるイメージ〕を取り入れたものが見られた。

2). 《対象（もの）の表現》：“富士山ならではのシンボル性・・・「逆さ富士」型建物の頂上では一面の開口が富士山を切り取っていることで、富士ヒノキでかたちづくられた建築は、湧水の水面に反映して象徴としての富士山が完成した・・・自分にとって富士山の思い出深い記憶は、山中湖畔の合宿所から見た「逆さ富士」の強烈なイメージだった。“（163-1）

《対象（もの）の表現》は対象の〔思想や理念の表現〕や、対象から〔連想されるイメージ〕、対象との〔類似性〕を表現した作品がみられる。

3). 《対象（出来事）の表現》：“教訓である「万が一と言われることでも起こり得る」ということを後世に伝える意味も込めて、現物資料の収蔵庫・展示室・サーバー室は3階に計画し、さらに来館者への原子力災害の説明と建物の構成に関連性を持たせた。“（168-1）

〔思想や理念の表現〕〔連想されるイメージ〕

《対象（出来事）の表現》は対象の〔思想や理念の表現〕や、対象から〔連想されるイメージ〕を表現した作品がある。

4). 《自然》：“周囲の山並みを彷彿とさせる、馬の背状にうねった屋根をもつ一棟の長い建物を建てて、その中に品々の置かれる背景となるべく、4枚に分れて全館を流れる木軸格子の屏風により、建築の要素をも、展示対象の従たる一部にしようとした。“（64-2）

〔周囲の自然を彷彿〕させるデザインにすることで、建築が《自然》を象徴となる。

3.1.4 【時間】について：“地下空間は、コンクリートの打放しの型枠を50mmのスギ板本実で0.9mmの凸凹をつける仕上げで、歴史の堆積をイメージさせる重厚な積層感を強調している。”（118-2）

【時間】概念を考察することは、「記憶」概念の根幹に迫ることと同義である。「記憶」があるおかげで、私たちは《現在》という実存の【時間】から抜け出して、《過去》や《未来》へと大きく【時間】展望を繰り広げることができるようになる。《現在》の視点から「記憶」を再編することは、《過去》の痕跡を創造的に《持続》させることであり、現在の意味を明確に刻むという点でデザインの本来的な姿を示している。

1). 《持続》：“古代の想像力と過去と現代に横たわる距離を浮かび上がらせるため、形態と配置において双子塚を反転させた。この反転の作用は、周囲の古墳群を照射し輝かせる。

“（69-2）

人の体験する複数の瞬間をまたぐ〔時間幅〕を要するものとして《持続》がある。ある場所の〔過去と未来をつなげる〕ことやまだ見ぬ未来に向けて〔永続性〕をもたせ、〔時間を内在させる〕ことで、《過去》と《現在》、《未来》が同時に現前する【時間】感覚を呼び起こす。

2). 《現在》：“外壁のもつ形態は、時々刻々変わる自然の“関東地方の古い民家の成り立ちや、蔵に関する思いつきが潜在的にあった。しかし府中の〈府〉の意味がくらであることは決定的なことであった。“（49-1）

建築がその【場所】固有の特質を表現するにあたり、参照する要素として〔郷土意識〕や〔場の記憶〕が挙げられる。個々人の記憶の器となる建築が、【場所】のイメージアビリティを高めることに貢献している。

2). 《自然》：“敷地にはその土地が求める形態が潜んでおり、結局は土地が建築をつくるのではないかと思う・・・土地に連続した建築の形態をつくるということがあった。自然環境を生かすことはその土地の霊に空間の構造を教わることで、いわば宇宙感を表現することともいえる。“（52-1）

建築の建つ【場所】には、固有の《自然》的、文化的な特質を備わっている。古代ローマでは【場所】に〔土地の霊〕が宿されている、ゲニウス・ロキという観念があった。建築は【場所】固有の記憶を集散的記憶へと変換する媒介となっている。

3). 《歴史》：“地中にある柱の遺構や石積み再現により、歴史の痕跡を新しい計画の中に留めている。“（153-2）建築が建つ【場所】において、先行している〔歴史の顕在化〕を計画に取り入れることや、既存の〔都市構造と関係づける〕ことは、新しい建築が《歴史》的行為であることを示すものとなる。中で、豊かな表情をつくり出すことができた。“（105-3）

過去の記憶は《現在》において再構成・再構築され想起される。《現在》の感覚は知覚が生み出すものであり、「記憶」の成立は知覚の成立と共時的である。〔時の移ろい〕は時間経過の了解を意味し、いま・ここの意識が生み出すものである。

3). 《過去》：“展示室は坑道をたどるように暗く、スキップフロアーを構成している。“（14-2）

《過去》の時間性をもったものを残し、〔過去との同時性〕を体感させるものや、新しい表現において〔時間の堆積〕を感じさせることで、《過去》の記憶を表現している。

4). 《未来》：“テーマを「平成の正倉院」として、現代の技術で、宝物・文書資料等を千年先の未来に継承できるような施設を目指したものです。“（147-1）

新しく建てられる建築が《未来》に〔継承〕され、周辺の環境と影響を及ぼしあうことを目指している。

5). 《体験》：“既存の歴史的環境も、博物館も、景観の保全を大一義にし、境内の拝観順路の中に組み込み、連続された拝観のシークエンスとしてとらえることができるテンブルミュージアムとして計画された。“（118-4）

建築《体験》における〔シークエンス〕や〔時間の流れ〕は、

表2 現代建築作品にみる「記憶」の概念の主題に関する概念構成とその分布

時期区分			第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	全期
第1水準【	第2水準《	第3水準【	100	100	114	55	369
風景 (124)	自然 (83)	周囲との調和 (46)	15	10	16	5	46
		新たな風景 (4)	3		1		4
		風景の知覚 (13)	4	3	5	1	13
		大地との連続性 (8)	6	1	1		8
		風景を強調 (7)	2	2	2	1	7
		風景の再生 (5)	1	2	2		5
	街並み (35)	周囲との調和 (18)	3	4	7	4	18
		新たな風景 (3)	1		2		3
		景観との連続性 (10)	3	3	3	1	10
		風景を強調 (3)	1	1	1		3
		風景の再生 (1)				1	1
	日本 (1)	日本の風景 (1)	1				1
	意識 (5)	心象風景の形成 (5)	1	2		2	5
	風土 (11)	日本 (1)	近代主義を日本の風土で再構築 (1)	1			
地域文化 (10)		風土になじむもの (5)	3	1		1	5
		地方性 (3)		1	2		3
		原風景への回帰 (2)		2			2
象徴 (90)	対象 (人) の表現 (38)	人柄の表現 (9)	2	1	4	2	9
		思想や理念の表現 (10)	2	3	5		10
		作品との対応 (5)	1	3		1	5
		連想されるイメージ (5)		1	2	2	5
		生家のイメージ (3)	1	2			3
		時代精神 (6)		4	2		6
	対象 (もの) の表現 (24)	類似性 (3)	2	1			3
		思想や理念の表現 (6)			1	5	6
		連想されるイメージ (15)	1	3	8	3	15
	対象 (出来事) の表現 (26)	思想や理念の表現 (8)	3	5			8
		連想されるイメージ (18)	1	5	10	2	18
自然 (2)	周囲の自然を彷彿 (2)		1		1	2	
伝統 (21)	日本 (11)	日本の伝統 (6)	3	3			6
		日本的空間特性 (5)		2	1	2	5
	地域文化 (10)	文化の伝承 (9)		5	1	3	9
		民族性 (1)	1				1
場所 (18)	地域文化 (12)	郷土意識 (5)	2	2		1	5
		場の記憶 (7)	3	3		1	7
	自然 (1)	土地の霊 (1)		1			1
	歴史 (5)	歴史の顕在化 (4)			3	1	4
		都市構造と関係づける (1)				1	1
時間 (46)	持続 (25)	時間幅 (4)	2	1	1		4
		永続性 (7)	2	1	2	2	7
		時間を内在させる (5)	1	2	2		5
		過去と未来をつなげる (9)	3	2	2	2	9
	現在 (5)	時の移ろい (5)		2	2	1	5
	過去 (10)	過去との同時性 (7)	6		1		7
		時間の堆積 (3)	1	1	1		3
	未来 (2)	継承 (2)		1	1		2
	体験 (4)	シークエンス (3)			2	1	3
		時間の流れ (1)			1		1
環境 (59)	体験 (32)	ひとつづきの体験 (2)	1		1		2
		体験の変化 (2)	1		1		2
		体験の繰り返し (3)	1	2			3
		偶発性 (1)			1		1
		選択性 (7)	2	1	4		7
		内外の連続性 (4)	3			1	4
		多様なシーン (10)	1	5	4		10
		五感に訴える (3)		2		1	3
	想起 (5)	追体験 (2)			1	1	2
		木漏れ日 (3)			3		3
	予期 (5)	期待感 (5)	1	1	1	2	5
	潜在意識 (5)	胎内潜り (3)	2		1		3
		日本の伝統 (1)	1				1
	意識 (12)	無意識的記憶 (1)			1		1
		日常の延長 (5)	1	1	1	2	5
		感情の埋没 (4)	3			1	4
		思索を深める (3)	1	1	1		3

《現在》進行形の「つつある」ことの不確かさとそれに伴う臨場感を与える。

3.1.5 【伝統】：“水平に長く延びる佇まい、柱と梁の軸組みによる前面の表現、薄明かりによる採光、非対称性による構成など、日本的空間構成の根源的要素を強調する設計である。”(153-3)

【伝統】は創造において何を「記憶」として伝承するか、現在においてどう意味づけをするかということの土台となる。《日本》の【伝統】的な空間構成や《地域文化》の伝承は集団で「記憶」している共同体の帰属意識を作り上げる。

1). 《日本》：“日本文化の根源にある空間構成を、日本の「床」の空間に求めた。”(149-4)

【伝統】は単に保存・修復をするだけでなく、[日本の伝統]や[日本的空間特性]を現在の文脈に沿って再解釈・再構成することで、持続可能な文化の形成を図ることができる。

2). 《地域文化》：“この資料館では異なった世代の人びとが交流し、次の世代に文化を継承していくことが、民俗資料館の大きな使命であると考えられている。”(64-1)

失われつつある地方の[文化の伝承]や[民族性]を計画に取り入れ《地域文化》の集成的「記憶」を形成する。

3.1.6 【場所】：“敷地は古代の風景が継承された場所性を強く感じさせる所である。緑の多い景観構成に参加しながら、いかに歴史の重層性を演出するかを課題とした。”(138-1)

ある【場所】には、その《地域文化》や周辺の《自然》の集成的記憶が建築により表現されている。《歴史》を集団とその【場所】との関係性として捉え、「記憶」として保持することが建築に求められている。

3.1.7 【風土】：“生家の窓よりも大きく、生家の小窓に呼応して全面に開こうとしたもので、北アルプスを背景とする松本平の原風景の中に生家の存在を全視覚の中にすくい取ろうとするものです。”(73-3)1). 《地域文化》：和辻哲郎によると、【風土】により自己了解を制約し、形としてあらわれたものが建築物であるという。《日本》や《地域文化》の【風土】における個人の「記憶」が集団的なものとなり、新しい建築物として結実する。

1). 《日本》：“欧米で完成した近代化の方法や感覚を、日本の歴史風土の中で再構築しなければいけない。この考えにおいて、外壁に、黒い藤岡瓦を積むことは自然のなりゆきである。屋根の構想も同じところに源がある。”(20)

日本が明治時代に受け入れた西洋文化の[近代主義を日本の風土で再構築]することで《日本》の風土を表象する。

2). 《地域文化》：“風土に忠実であり、長持ちする建築をつくることを念頭に置いているが、この博物館では信州なるがゆえに設計のポイントを冬に置き、日常の体験を踏まえて丹念に煮詰めてきた。”(26-1)

《地域文化》の根底に流れている[風土になじむもの]を計画し、[地方性]を獲得する。また人間の本来性として、[原風景への回帰]をすることは、新たな自己了解の形であるといえる。

3.2 現代建築家の言説にみる「記憶」の概念の主題に関する概念構成

前節で分析を行った、「記憶」の概念の主題に関する鍵語の概念構成とその分布を表2に示す。

4. 現代建築家の「記憶」の概念の表象に関する考察

4.1 「記憶」の概念の表象に関する分析：現代建築家の言説における「記憶」の概念の主題をどのように具体化しているかを表象の鍵語として抽出し、その内容をKJ法を用いて検討、分類・整理することから、いくつかの水準に分類した。この結果、建築のどの部分に表象しているかという部位と、その部位に対して、どのような操作をし、特性を与えたかという手法として捉えることができた。部位は、表象が投影される箇所を限定できない場合は【全体】とし、限定できる場合は【部分】とした。【部分】は、建物の内部空間を表象の対象としている《内部》([室],[架橋]),《外構》([軒下空間],[中庭],[広場],[通路],[アプローチ])と《外皮》([外壁],[屋根],[屋上],[ヴォリューム])として捉えることができた。手法に関しては、

【潜在性の表象】、【先行形態の表象】、【イメージの投射】の三つに大枠として捉えることができ、建物の要素間の関係性を問題にした《配置》、形態を操作的に用いて表現する《形態》、建物に用いる素材やその質感によって表現する《材質》、大きさや高さなど空間におけるスケールを表現とした《尺度》、その他、《自然要素》、《技術》、《ディテール》、《色彩》の内容で捉えた。また、建物にあるイメージを与えることで表現するものを《隠喩表現》とした。例えば、“遠景として見たとき、御垣に囲まれた社殿の屋根群が明瞭に記憶されることに倣い、この建築も樹林と勾玉池の水面に囲まれた、ふたつの大屋根が強く印象に残るように構成されている。”は部位において【部分】-《外皮》-「屋根」とし、手法では【先行形態の表象】-《尺度》となる。

4.2 現代建築家の言説にみる「記憶」の概念の表象に関する概念構成：記憶」の概念の表象に関する鍵語の概念構成とその分布を表3に示す。

5. 現代建築家の言説にみる「記憶」の概念の主題とその表象の通時的傾向に関する考察

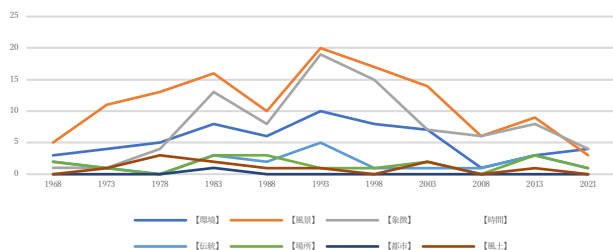
これまでの分析の結果を用いて、「記憶」の概念の主題および表象の通時的な傾向を分析する。その結果、それぞれをI期“思考の発散”(1968-1984)、II期“ポストモダニズム”(1985-1995)、III期“建築の本質性”(1996-2011)、IV期“ローカリズム”(2012-2021)、というように4つの時期区分に分類することができた。

以下では主題の通時的傾向(図1)を元にして、それぞれの時期区分に対して社会事象と照応させ、考察を行う。

表3 「記憶」の概念の表象に関する鍵語とその分布

部位	時期区分			第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	全期	
	第1水準 []	第2水準 《 》	第3水準 []						
全体 (38)				185	175	213	107	680	
	全体 (38)				14	9	14	1	38
	部分 (300)	内部 (106)	室 (98)		28	19	40	11	98
			架構 (8)			4	1	3	8
		外皮 (173)	外壁 (50)		21	8	11	10	50
			ヴォリューム (91)		17	21	36	17	91
			屋根 (31)		6	16	4	5	31
			屋上 (1)		1				1
		外構 (21)	通路 (5)		2	2		1	5
			アプローチ (8)		4	4			8
		広場 (5)			2		3	5	
	軒下空間 (3)				2	1	3		
手法	潜在性の表象 (94)	自然要素 (21)		3	5	12	1	21	
		配置 (61)		19	12	20	10	61	
		形態 (12)			1	6	5	12	
	先行形態の表象 (101)	自然要素 (15)		3	4	4	4	15	
		配置 (41)		14	9	15	3	41	
		形態 (18)		3	6	5	4	18	
		尺度 (24)		10	7	4	3	24	
		材質 (3)		2			1	3	
	イメージの投射 (147)	材質 (61)		20	14	15	12	61	
		技術 (2)					2	2	
		ディテール (5)			2	3		5	
		色彩 (12)		5	1	4	2	12	
		隠喩表現 (67)		13	29	17	8	67	

図1 主題の通時的傾向



5.1 主題とその表象の通時的傾向

5.1.1. 第Ⅰ期“思考の発散”(1968-1984)では、主題が発散しているのがわかる。モダニズムにおいて建築家がある一つの思想に向かって奔走してきたものが崩壊し、さまざまな方向性に向かった時期である。建築に限らず、モダニズムは一般的に諸芸術の自律性と純粋性を求めたものとされている。建築においては合理性が追求され、無時間的な空間が作られた。近代和風庭園において世界観的前提が成立しなくなった時、象徴主義的庭園から自然主義的庭園へと変化したようにこの時期の建築においても【風景】との関わりを主題としたものや建築に【時間】を内在させたものが増えてきている。中でも【風景】を主題にしている作品が多い。これは、経済が豊かになり、物的な環境が整い、都市の中に多くの公共建築が建てられる高度経済成長期の時期と一致する。

5.1.2. 第Ⅱ期“ポストモダニズム”(1985-1995)では、オイルショックの影響からバブル経済が始まるまでは、作品数が減少し、バブル経済からバブル経済の崩壊、阪神・淡路大震災までは作品数が増加している。ポストモダニズムが主流としてあった時期は、建物に強い個性が求められ、装飾や外観のデザインに物語性を【象徴】させていた。そのため、表象

については、[外壁]・[ヴォリューム]・[屋根]の《外皮》における【イメージの投射】による表象が多い。他方で【伝統】を主題としている作品が比較的増加している。これは、ポストモダニズムの反動から活動した路上観察学会にみられるように、失われていく都市を取り戻す動きと一致する。

5.1.3. 第Ⅲ期“建築の本質性”(1996-2011)では、全体的に作品数が減っているが、その中で【時間】が相対的に減少していないことがみてとれる。また、表象においては唯一《内部》空間での表象が多くみられた。これは、ポストモダニズムの【象徴】を主題とし、外観に関心が集中していた反動として建築の本質性を考える建築家が増えたことによるものであると考えられる。《内部》空間における《体験》が【時間】性を共なったものとなり、[シークエンス]や[時間の流れ]を考慮した作品が見られるようになった。

5.1.4. 第Ⅳ期“ローカリズム”(2012-2021)は「地方創生」など地域や地方に一般的な関心が高まっており、地域における公共施設の在り方や地域性の捉え方の再検討が求められていることから2013年に全体的に数が増えて、その後2011年に東日本大震災が起こり、数が落ち込んでいる。その中で特徴的なのは、【時間】および【時間】が主題として比較的落ち込んでいないことが挙げられる。東日本大震災を境に、インクルーシブな建築が求められようになり、ワークショップを用いて、利用者が設計段階から計画員参加するプロジェクトが増えたことと時期を同じくしている。

5.1.5. 全期(1968-2021)を通して：Ⅰ期からⅡ期にかけては、【風景】など、物的な要素を「記憶」の主題としていたが、Ⅲ期からⅣ期にかけては、現象的な要素を「記憶」の主題にしていることが多い。これは、阪神淡路大震災前後で分けられることができ、前では、本来の建築の表現としてあった国家や共同体の集合的記憶を形象化した伝統的な表現に聳え立つものではなく、《街並み》や《自然》の【風景】といった周辺環境との関係を主題としているのに対し、後では建物それ自体の意義を主題としているものが多くなったと言える。

表象に関しては、全期を通して [外皮] に【イメージの投射】をすることが多い。建築家の「記憶」の表象は [通路]・[アプローチ]・[広場]・[軒下空間] のような《外構》に現れるものは少なく、主に [室]・[架構] のような《内部》や [外壁]・[ヴォリューム]・[屋根]・[屋上] のような《外皮》に現れることが多い。

6. 現代建築作品にみる「記憶」の概念の主題とその表象に関する考察

6.1 「記憶」の概念の主題とその表象の関係性に関する事例的検証

6.1.1 分析対象作品とその検証方法：建築における「記憶」の概念の分析から主題の第一水準と表象の第一水準が多く当てはまる検証対象作品を抽出し、表象も併せて、統合的な視点において再構築することで、建築の「記憶」の概念に関する主題とその表象の関係性を明らかにする。

6.1.2 事例的検証およびその考察

抽出した6作品に対して、図面（配置図・平面図・断面図・立面図）を作品データシートにまとめた後、作品データシート・写真・アイソメトリック図を用いて、言説の分析から得られた「記憶」の概念の主題とその表象である手法の鍵語（《自然要素》・《配置》・《形態》・《尺度》・《材質》・《技術》・《ディテール》・《色彩》・《隠喩表現》）のうち当てはまるものを分析項目とし、【潜在性の表象】・【先行形態の表象】・【イメージの投射】について事例の検証を行い、「記憶」の概念の主題とその表象についての関係性を考察する。

図2 データシート No.37 土門拳記念館

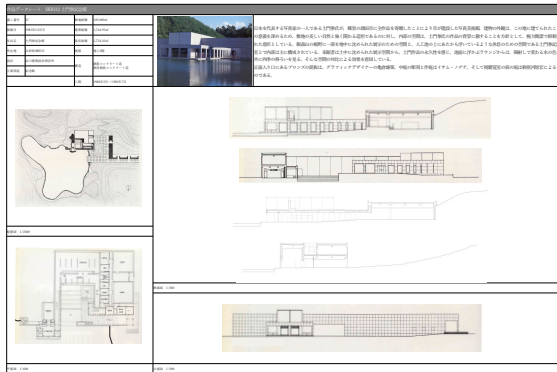
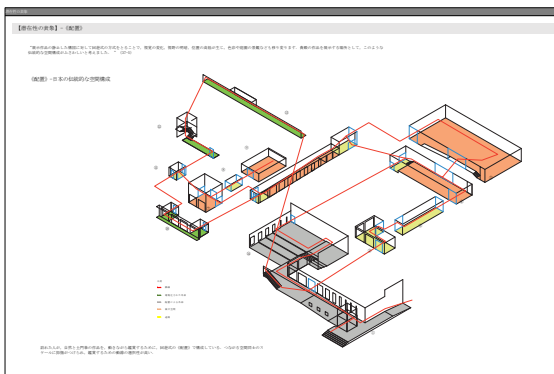


図3 分析シート No.37 土門拳記念館



No. 37 土門拳記念館の検証結果の一部を述べる。

この作品における「記憶」の主題は、展示対象である土門拳を【象徴】すること、敷地の【風景】を強調すること、日本の【伝統】を表現することである。

この作品における「記憶」の概念の主題とその表象の関係は、記念館の対象である土門拳の[思想や理念の表現]や[作品との対応]を池の上に浮いているような[室]と地中に埋めた暗い[室]の対比による断面構成に【イメージの投射】をすることで、「記憶」の概念の主題である【象徴】を表象している。内部構成は、静止している展示作品に対して鑑賞者を歩かせるような[日本の伝統]にある回遊式の動線を設けていることにより、視覚の変化、視野の明暗、位置の高低が生まれる。このような回遊式動線により「記憶」の概念の主題である【伝統】を【潜在性の表象】を実現している。外観は周囲の自然に対して幾何学的な[ヴォリューム]が敷地に埋め込まれていることで「記憶」の概念の主題である【風景】の【先行形態の表象】を実現している。

結

本研究では、現代建築家の言説および作品の分析を通して「記憶」の概念の主題とその表象についての概念構造(図4)を明らかにした。「記憶」に関する主題とその表象の意味内容は現象的一物的、普遍性一固有性として大枠を捉えることができた。このうち、現象的側面では、《過去》の痕跡を創造的に《持続》させ、現在の意味を明確に刻む【時間】を主題としたものや、身体を用いた《体験》により主体に受容される【環境】を主題としたものがみられた。物的側面では、集団的「記憶」としても想起される《自然》や《街並み》の【風景】を主題としたものや、《地域文化》や周辺の《自然》の集合的記憶が刻まれた【場所】を主題にした作品がみられた。主題の表象に関しては、主に[通路]・[アプローチ]・[広場]・[軒下空間]のような《外構》に現れるものは少なく、主に[室]・[架構]のような《内部》や[外壁]・[ヴォリューム]・[屋根]・[屋上]のような《外皮》に現れることが多い。また、通時的傾向に関しては、I期からII期にかけては、【風景】など、物的な要素を「記憶」の主題としていたが、III期からIV期にかけては、現象的な要素を「記憶」の主題にしていることが多い。これは、阪神淡路大震災前後で分けられることができ、前では、本来の建築の表現としてあった国家や共同体の集合的記憶を形象化した伝統的な表現に聳え立つものではなく、《街並み》や《自然》の【風景】といった周辺環境との関係を主題としているのに対し、後では建物それ自体の意義を主題としているものが多くなったと言える。建築に、「記憶」の概念の生成を導くという課題において、本論における分析は、今後の建築家の「記憶」に対する創作活動の指針を示すものであると考える。

参考文献

- 1) Shin-ichi OKUYAMA, Shin YAMADA and Kazunari SAKAMOTO: Spatial Conceptions of Architects on Contemporary Houses in the Articles, Study on Design Theories of Architects in Japan, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No.456, pp.123-134, 1994 (in Japanese)
奥山信一, 坂本一成ほか: 建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル, 建築家の創作論に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.456, pp.123-134, 1994 (DOI: https://doi.org/10.3130/aija.59.123_1)
- 2) Shin-ichi OKUYAMA and Kazunari SAKAMOTO: Architectural Theories in “Shin-Kenchiku” after World War II, Thoughts on Housing and City, Design Themes, Spatial Conception by Contemporary Japanese Architects, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No.477, pp.101-108, 1995 (in Japanese)
奥山信一, 坂本一成: 戦後「新建築」誌における建築家の創作論: 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル, 日本建築学会計画系論文集, No.477, pp.101-108, 1995
- 3) Shingo SUEKANE: STUDY ON CHARACTER AND TRANSFORMATION OF RUDOLPH SCHINDLER'S ARCHITECTURAL WRITINGS FOCUSING ON THEIR ISSUES AND COMPOSITION, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), vol.73, No.627, pp.1155-1164, 2008.5 (in Japanese)
末包伸吾: 主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラの

論考の特質とその変遷, 日本建築学会計画系論文集, vol.73, No.627, pp. 1155-1164, 2008

- 4) 水谷友也, 末包伸吾: 現代建築における時間の概念とその表現手法に関する研究—1990年代以降の美術館・博物館・劇場の事例分析を通して—, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 2009
- 5) 三村尚央: 記憶と人文学, 小島遊書房, 2021
- 6) 笠原一人, 寺田匡宏: 記憶表現論, 昭和堂, 2009
- 7) ロバート・ヴェンチュリ, スコット・ブラウン (石井和紘, 伊藤公文訳): ラスベガス, 鹿島出版会, 2011
- 8) コーリン・ロウ, フレッド・コッター (渡辺真理訳): カラー・ジュ・シティ, 鹿島出版会, 2009
- 9) 日本建築学会: 建築論事典, 彰国社, 2008
- 10) アンリ・ベルクソン (杉山直樹訳): 物質と記憶, 講談社学術文庫, 2019
- 11) 平井靖史: 世界は時間でできている—ベルクソン時間哲学入門, 青土社, 2022
- 12) 中谷礼二: セヴェラルネス+ 事物連鎖と都市・建築・人間, 鹿島出版会, 2019
- 13) 新建築, 新建築社
- 14) エイドリアン・フォーティ (坂牛卓, 辺見浩久訳): 言葉と建築, 鹿島出版会, 2006
- 15) ハリー・F・マルグレイブ, デイヴィット・グットマン (沢岡清秀監訳): 現代建築理論序説 1968年以降の系譜, 鹿島出版会, 2018
- 16) 鈴木博之: 近代建築史, 市ヶ谷出版, 2008

- 17) ジャック・デリダ (谷口博史訳): エクリチュールと差異, 法政大学出版局, 2013
- 18) モーリス・アルヴァックス (小関藤一郎訳): 集会的記憶, 行路社, 1999
- 19) ヴァルター・ベンヤミン (浅井健二郎訳): 一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代, 1997
- 20) マルセル・ブルースト (鈴木道彦訳): 失われた時を求めて 1 第一篇 スワン家の方へ I, 集英社文庫, 2006
- 21) 五十嵐太郎, 菊地尊也: 現代建築宣言文集 [1960-2020], 2022
- 22) 藤村龍至: 批判的工学主義の建築, NTT出版, 2014
- 23) 鈴木博之, 東京大学建築学科編: 近代建築論講義, 東京大学出版会, 2009
- 24) 五十嵐太郎: モダニズム崩壊後の建築—1968年以降の転回と思想, 青土社, 2018
- 25) 五十嵐太郎: 現代建築に対する 16 章, 講談社現代新書, 2006
- 26) 日笠直彦: 日本近現代建築の歴史 明治維新から現代まで, 講談社選書メチエ, 2021
- 27) 伊東豊雄: 「建築」で日本を変える, 集英社新書, 2016

謝辞: 本論文は次の論考に加筆修正を加えたものである。
高坂啓太, 末包伸吾, 後藤沙羅, 増岡亮: 現代建築作品における「記憶」の概念の主題とその表象に関する研究 —1968年以降の博物館・記念館・資料館の事例分析を通して—, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 第63巻, pp. 393-396, 2023.

図4 「記憶」の主題とその表象に関する概念構造図

